

## 別子銅山史の留意点

平成27年3月15日(日)13:30~15:00

別子銅山記念図書館 専門員 坪井利一郎

別子銅山に関する本が多く出版されているが、前に出版された本を参考文献として使っているので間違いが継承されている。別子銅山を読む講座で、別子銅山に関する本の解説をしてその留意しなければならぬ点に気づいたのでここに記す。

### 蘭塔場

元禄7年(1694)の大火災で亡くなった132人の内、元締の杉本助七と手代3人は旧勘場(歓喜・歓東坑から10m下)の沢下に土葬された。当時はここを蘭塔場と呼んでいた。残る128人の遺骸は、それぞれ手分けして葬られた。火災の少し後に、縁起の端に山神社(大山積神社)が、現在の蘭塔場跡には観音堂が設けられた。

明治11年(1878)、広瀬幸平が4人の碑石を現在の蘭塔場に上げた。そして大正5年(1916)の採鉱本部撤退で、蘭塔場の墓石は瑞応寺の西墓地に移された。

現在は旧別子の蘭塔場では元禄の大火災で亡くなった殉職者の蘭塔法会が行われている。4人の墓碑を山下に移し、殉職者全員の慰霊の場と変わった。両墓制にみられる「拝み墓」と化した。

東臚筆の別子銅山図には、歓喜坑道下の道端に祠らしきものが描かれている。

銅山略式志の第二図・銅山繁永之図に墓地が描かれているので蘭塔場もここか。風呂屋谷の牛車道の栄久橋の北詰の西方上部に当たる。牛車道の2箇所(折り返しあたり)になるうか。歓喜・歓東坑から30m下、西へ150mあたりになる。

【参考文献】	住友の歴史(上)	住友史料館	思文閣出版
	別子銅山図	東臚	
	銅山略式志	椎亭老人著・尾崎一楼画	

### 泉屋道

元禄4年(1691) 別子開坑で、天満道を使う。(第一泉屋道)  
(第一泉屋道も使用期間中に天満村から浦山村への最短距離に変更)

元禄7年(1694) 天満道と新居浜道の駄賃比較。 105貫500目と49貫200目

元禄8年(1695) 新居浜道を西条藩に出願するが、境界争いで沙汰なし。

元禄14年(1701) 再度新居浜道を西條藩に出願。立川銅山とは違う新道で内諾。  
かうとう谷と赤太郎の尾越え・種子川山村・新須賀村ルートは出願  
だけで終わる。(第二泉屋道)

元禄15年(1702) 新居浜道の開設、永代請負等について幕府の許可回答。  
口屋開設。(第三泉屋道)

新居浜道は3月以降に新造、8月以降使用といわれている。

[住友別子鉱山史・上巻]

元禄17年(1704) 幕府領と西條藩領の知行替え。

元禄18年(1705) 住友新道に立川銅山仲持が通行するとの訴状。(位置関係が分かる)

【参考文献】 住友の歴史(上) 住友史料館 思文閣出版  
住友別子鉱山史・上巻 住友金属鉱山(株)

## 産銅高

住友別子鉱山史(三百年史)で、従来の72万トンが65万トンに改められた。

## 銅山越えの標高

古い地図では1291mがあるが、現在は1294mである。

## 銅山峰

新居浜市教育委員会が文化財・史跡等の標柱として銅山峰に「銅山峰の標柱」を建てていたが朽ちて現在は無くなり、銅山峰が不明になっている。昭和30年代の新居浜市の広報映画の音声に「1324mの銅山峰」とある。なお、露頭が横断しているあたりの標高を1325mの記述があり1324mに近いが、1330mと1320mのコンターの間をとったきらいもなくてはならない。銅山峰の峰は、「畝」「棟」に当たる言葉で、銅山峰の場合、山岳用語としては「稜線」に近い。

元は「足谷の峰」「船窪の峰」と呼んでいた。足谷を詰めていった先の峰の意。船の底のように遠望できる峰の意。銅山峰に凹地があり船窪と呼ばれているのは、船窪の峰にある凹地、窪地の意。

## 露頭線

1500m～1800mといわれており、現在は1500mの表記が定着。

## 望煙楼

明治10年上棟の久保田時代は東と南が障子戸、上原に移築されて北と東が障子戸となる。左へ90度動いている。久保田時代は望煙楼から銅山峰を望み、旧別子の製錬所の煙を想定して見ていた。

明治19年(1886)移築の上原時代は、望煙楼からは大阪と新居浜を往来する汽船の煙を見た。惣開製錬所の操業は明治21年(1888)だから、製錬所の煙は少し後から見た。

## 開坑記念日

江戸幕府から開坑許可日の5月9日。正式には陰暦だが、現在は太陽暦で示している。

別子銅山記念館の天井には、5月9日の正午に太陽が南中すると陽光が射し込むように穴があげられている。

## 開坑日

元禄4年閏8月1日。

## 稼業年数

元禄4年(1691)閏8月1日開坑、昭和48年(1973)3月31日閉山。

年から年だと283年。

実稼働は281年と8ヶ月。

## 四阪島

美ノ島、家ノ島、明神島、鼠島の4つの無人島の総称である。海上の行政境界域に浮かんでいた四つの島。宮窪町の境にある四島。境の島である。元は四坂島と書いていた。

坂は「五十の坂を越す」のようにものごとの境として使う用例がある。「境=𠬞」が「𠬞」に訛った。阪から阪への変更には大阪市の「坂から阪への」変更と同じ。坂の字は分解すると「土に反る」となり死んで土に葬られ土に帰るとなるので、忌み嫌って、土を「こざとへん」に変える。「こざとへん」は「阜」の略であり、高く盛り上がった地形を現し、隆盛につながる。

## 製錬所と精錬所

鉱石から金属をとるのが製錬。高橋製錬所、惣開製錬所、山根製錬所、四阪製錬所。

金属の純度を上げるのが精錬。立川精錬所のみ。

## 高橋製錬所の一時中止

明治13年(1880)に2座が完成した。従来は技術が未熟で一時中断したと言われていたが、アメリカの銅価格の切り下げで世界の銅価格が下落して一時中止となった。明治24年(1891)頃から洋式製錬が再開した。

## 惣開

広瀬幸平建立の惣開之記から清水総右衛門が新田開発したからというのではない。それより90年前の新居浜惣改帳に「惣開」の地名が出て来ている。

## 元号

明治元年	慶応 4年	9月 8日～	端出場水力発電所開設は明治45年5月
大正元年	明治45年	7月30日～	自彊舎開設は大正元年8月
昭和元年	大正15年	12月25日～	
平成元年	昭和64年	1月 8日～	

## 昭和通り

完成は 昭和6年6月10日。

開通式は昭和6年7月 5日。

## 三橋

共栄橋、共存橋、申孝橋。共存橋は、若水町のつづら淵から流れる小川に架かり、共栄橋は、尻無川に架かっている。2つで共存共栄となる。別子鉱業所所長の鷲尾勘解治の「企業は労働者・地方の繁栄とともにその利を同じくして栄える」との持論からの命名である。

申孝橋は、西原町のバリューの足下の水路の上に架かっている申孝橋は「徳をたつること申孝なり」からきている。申孝とは、正しく清らかな心、私心のないことを意味。

## 天満浦の港

千々ノ木川の河口部。旧河道が湾曲して残っている。

明治41年の陸地測量部の地形図には天満漁港は建設されていない。明治43年の写真によやく現在の波止の北西部に波止が写っている。

## 川之江代官所

広瀬幸平と川田小一郎が会談した時は伊予銀行界限。城山の麓への移転は、明治3年(1870)正月。(坂本屋当主の話しでは、広瀬は坂本屋に宿泊した。)

## 煙害問題の住民側のリーダー

賠償契約書の所持から桜井村長の曾我部右吉。曾我部は一色耕平の東予煙害史に対して「あれは周桑郡煙害史である」と評している。契約調印の記念写真に鈴木馬左也の隣に座っているのは曾我部。

## 切り上り長兵衛

泉屋叢考13では従来の誤謬を逐一訂正して真相を正している。史料を突き合せていくと時間的につじつまが合わないので、長兵衛については疑義が残るとしている。住友別子鉱山史(三年史)では伝説の人としている。

切り上り長兵衛の妻の墓石が、瑞応寺西墓地にあるので、今後の調査・研究を要する。

## 架空索道

単線式(米英式)と、複線式(ドイツ式)がある。

単線式は、1条の鋼索を使って運搬を行なうものであり、

複線式は、1条は搬器を支え、他の1条で以って運搬を行う。

## 通洞と隧道

通洞は出入り口が1つの水平の穴。

隧道は出入り口が2つの水平の穴。トンネル。

## 間歩と間符

間歩は、狭義では「山師が請け負った鉱区」、だが広義では「坑道」をいう。一般に坑道のことを石見銀山のように「間歩」と書いていたが、別子銅山の坑道は入口に護符を貼っているので「間符」と書く。

入口から右手 1天照皇大神 2八幡大菩薩 3不動明王

入口から左手 1春日大明神 2山神宮大山積大明神 3薬師如来

石見銀山の守護神はタタラ系の<sup>かなやまひめのかみ</sup>金山毘売神。別子銅山では大山積の神。

## 明治期の別子山村の人口

別子山支所の人口統計では、明治30年代で最高の明治38年で11,186人。

明治30年代の人口順は、1位松山市、2位今治市、3位宇和島市、4位別子山村。

## 粗銅の純度

従来は80%~90%と言われていたが、現在は90%。

【参考文献】 住友の歴史(上) 住友史料館 思文閣出版

## 昭和2年の鉱量調査

残り17年分と鷲尾勘解治が発表。逆断層で続きを見失っていた。

## 自彊舎の創設の根本方針

仏教と儒教では道に入る行き方が違う。仏教は悟りを得て「下化衆生」を行うが、儒

教は日々の行いを、忠信を主として行うことで「下学而上達」する。初心者には儒教の教えが適当であるとの考えから基本方針に選んだ。

### 製錬所の煙突高

四阪島製錬所	明治38年	約64m	(後に先端が4度傾く)
	大正3年	30m	(6本煙突)
	大正13年	64.2m	71.5mは間違い
山根製錬所	明治21年	20.145m	18mは間違い

### 住友総理事

伊庭貞剛が理事制を敷く。広瀬幸平は総代理人であったが、明治29年(1896)の家法改正で「総理人を総理事とする」としたので、後から広瀬を初代総理事と表記する。

### 住友の定年制制定

4代目の総理事・中田錦吉。伊庭貞剛の「老人の跋扈」の戒めを成文化した。

### 別子鉱山鉄道の機関車

機関車はドイツのバイエルン州ミュンヘン市で製造された。別子銅山記念館前に展示保存されている別子1号は、車体番号から別子4号である。番号を後付けした。

### 東洋のマチュピチュ

旧別子にある蘭塔場をインカの遺跡と見立てて「住友のインカ」と称したところから、東平の貯鉱庫をマチュピチュのピラミッドに見立てて「東洋のマチュピチュ」と称するが、一の森・小学校跡・二ノ森が、ワイナピチュ(若い峰)・神殿跡・マチュピチュ(古い峰)に相對する。小女郎川・足谷川のV字谷もウルバンド川のV字谷に相對する。

### 大鉋

原石にしめ縄を飾った簡素な大鉋は、縄を巻いた大鉋の前段階の姿ではない。合理化で簡素にただけである。

四阪島では銅製錬所とニッケル製錬所があり、銅とニッケルの大鉋があった。ニッケルはニッケル鉋をコンクリートで固めて成形した。

### 大鉋の歌

大鉋の歌は、木遣り歌の変調。歌詞、囃子は100年前と変わっている。3番と4番の歌詞の前半部が入れ替わっている。5番の「大鉋の酔」が「大鉋の絵、大鉋の会、大鉋の倉」などに間違っえいて表記されている。

囃子も100年で変化してきている。木遣り歌の「やるよー」「いいよー」が元で、「はじめるよー」「えーよ」の意味合いである。

### セットウ

明治の近代化でヨーロッパから入ってきた手掘用片手ハンマー。フランス語のマーセットを短縮して「セットウ」と呼んだ。「石刀」「石頭」と漢字で書くことがある。岩を穿つ田金を打ったり、支柱工具として使われた。

## 盛山棒

ダイナマイトを装着する穴をあける田金の一種で、先端は平田金になっている。「ボウ」と呼ばれていた物を、広瀬幸平が別子銅山を盛況にする物として命名した。寸法から大小がある。

## 東平

「とう」は「峠」の古語の「田尾越え」「田和越え」の「越え」が欠落した「田尾」「田和」から「峠」への移行期の名称。「なる」は緩傾斜地のこと。「とう」に陰陽五行の「東」の漢字を充てる。太陽が昇って行く様から隆盛の意味となる。

## 東平の最盛期の人口

従来は約3,800人といわれていたが、昭和元年の人口は5,000人余り。

【参考文献】 別子銅山が育んだ山田社宅現況調査報告書

## 東平坑

採鉱部が第四通洞以下になったのに、第三通洞上下の東平坑で鉱石が掘られたのは、当時としては貧鉱とされた鉱石が、深部の鉱床よりも相対的に含有率が高くなったから。坑内の充填材とした鉱石を再度採取する氷掘りをした。

## 高橋

「高橋」は「高端」。英語のHigh Bridgeでなく、High Edge。

## 端出場

錦繡峰の分岐尾根が打除の所へ出た端の所の意味。元の端出場は、現在、打除と呼んでいる所だった。意味合いは「高橋」に同じ。

## 端出場鉄橋・端出場隧道

鉄道橋の命名方法は、架ける河川名 + 橋梁 となる。足谷川に架ける橋梁だから足谷川橋梁 となる。道路橋だと「〇〇橋」となる。

登録有形文化財に登録申請時に、別子鉱業所内では、端出場鉄橋と命名していたので最初の名称を登録文化財名にしてもらうように依頼した。明治26年開通へ向けての県への申請は「足谷川橋梁」だった。

現在、「打除」と呼んでいる所が「端出場」だったが、端出場隧道の北側が「端出場」となったため、元の「端出場」が「打除」と呼ばれるようになり「打除鉄橋」と呼ばれるようになっていた。

中尾の尾根のトンネルから「中尾トンネル」と呼ばれていたが、これも最初は「端出場隧道」と命名していたので、登録有形文化財名も「端出場隧道」で依頼した。

## 歓喜坑あたりでの試掘

大露頭の標高1300mより100m下の状況が分かるので、歓喜坑の谷筋の露頭線を試掘した。

## 三角の水没

安政3年で、寛永疎水から三角まで160挺の箱樋使用。内9挺が水没している。  
明治7年・8年のロイ・ラロックの調査では、寛永疎水から三角まで317.67m。  
内98mが水没している。

$317.67\text{m} \div 160\text{挺} = 1.985\text{m}$  箱樋で約2m引き上げる。

## 東延

元禄時代には東延を「大根戸」と呼んでいた。「根戸」は鉱山用語では「舗の最も低い場所」。別子鉱床は東にいくほど銅の含有率が良くなるので、歓東坑から富鉱に導かれて掘り進んだところ。江戸末期の三角の富鉱帯の地表が東延。根戸は転じて富鉱の意味となり、根戸鉱の名称となる。大がついて更なる富鉱、更なる深い場所。

## 小女郎川と足谷川

明治44年(1911)頃の愛媛県土木部発行の「愛媛県管内図」では、

小女郎川 (殿小屋方面から流下して)本谷川を合せて鹿森ダムまで。

足谷川 銅山嶺北下から下流種子川と合流する地点まで。

国領川 (足谷川が)種子川注口より瀬戸内海(河口)まで。

愛媛県管内図は、源流から下ってくると合理的に合流点で区切られている。しかし、上って行くと「本流と支流」の考えから、愛媛県の河川図では、足谷川と小女郎川が入れ替えた。足谷川(東平方面→清滝方面)と小女郎川(清滝方面→東平方面)。国土地理院の5万分の1地形図もそれに従って入れ替わっている。

## 上部鉄道と牛車道

上部鉄道は小川東吾の提案で、既存の牛車道を改築して活用した。明治24年(1891)9月に牛車道の付け替え工事に着手した。上部鉄道の上にある牛車道は付け替えた道である。切通しの箇所、鉄道敷きと牛車道跡がいっしょに残っている。

【参考文献】 広瀬幸平と近代日本 末岡照啓 広瀬歴史記念館

## 別子銅鉱床

開坑当初の含銅量は20%、閉山時は1.数%。

山根製錬所のころは、銅10%、鉄50%、イオウ40%。そこから製鉄、硫酸生産を着想し実践するも採算に合わず失敗。

【参考文献】 広瀬幸平と近代日本 末岡照啓 広瀬歴史記念館

## 石ヶ山丈

「ジョウ」「ヤマ」は接尾語で「山」の意味。地形用語の「ジョウ」は崖の意味となる。石ヶ山丈は「石ヶ山の崖」となる。

炭が燃えきって灰になることを「ジョウになる」という。能でいう翁を「尉じょう」というところからである。翁は黒髪が白髪に変わっていく。黒い炭が白い灰になる。焼き固まった炭が燃えて灰となり崩れるので、地形用語で「ジョウ」が崩落地形、崖の意味を伴う。「ジョウ」の音に「丈」「城」の漢字を当てた。

## ルイ・ラロックと広瀬の年収

明治7年、8年のルイ・ラロックの月給600円 年収7200円

広瀬幸平の月給100円の6倍

昭和60年に換算すると月給1800万円 年収2億1600万円

(高橋利光の「別子銅山ー明治期の数値試算」山村文化6号)

新居浜市職員の初任給 (新居浜市政だより)

	昭和60年	平成27年	
大卒	104,000円	174,200円	1.675
高卒	87,700円	142,100円	1.620
平均			1.6475

ルイ・ラロックの年収7200円は平成27年では

$216,000,000円 \times 1.6475 = 355,860,000円$

**3億5586万円**

広瀬幸平の年収1200円は平成27年では

$36,000,000円 \times 1.6475 = 5931万円$

## 白水丸とルイ・ラロック

広瀬幸平の「半世物語」では、ルイ・ラロックが和船を嫌ったので汽船を購入したと記述しているが、ルイ・ラロックのために白水丸を購入していない。

住友が愛媛県へ外国人技師の雇用願いを工部・外務両省へ提出したいので添え状を依頼したのに対して許可が下りたのは明治6年(1873)9月。リリエントール社はルイ・ラロックと既に6月に仮契約書を結んでいた。住友が木造蒸気汽船を購入して白水丸と命名したのは明治5年(1872)11月なので、フランス人技師の別子赴任説は間違いである。岩崎弥太郎経営の九十九商会の汽船を利用していたので、利便性から購入した。

## 元禄7年の大火の迎え火

向かい火はなかった。従来、立川銅山は老衰期に入り貧鉱の採鉱となっていたので、開坑して間もない富鉱を採鉱していた繁栄期の別子銅山への日ごろの妬みから火を放ったといわれていたが、間違った報告に基づく記述が間違ったまま伝わっていった。

## 日浦

日当たりのいい所。農家の玄関先や納屋の前の日当たりのいい小広場を「ヒノウラ」という。「浦」は「ウレ」が変形して「ウラ」。上流、先端の意味。日の射す先端で日当たりのいい箇所を指す。



# 日本近代化の起点

平成27年1月7日

別子銅山記念図書館 専門員 坪井利一郎

嘉永6年(1853)、ペリーが黒船で浦賀に来る。翌年の安政元年(1854)、否応なしに開国させられる。幕末期に幕藩営工業として、幕府の長崎製鉄所・造船所、肥後の反射炉・製錬所、鹿児島集成館の鉄砲・蒸気船・電信機の製造を試みる。

明治維新を画期として日本近代化を行った起点はどこなのか。明治4年(1871)の岩倉使節団による新政府の欧米視察が起点である。新政府を樹立はしたものの、これからどの方向向かうかの意見が統一されない中で、帝国主義の侵略が当たり前という状況下で対外的な独立を保たなければならない。この難問の解決のために、近代国家としての政治権力と経済構造の原理を探しに先進地のヨーロッパに出かけて行った。アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスを全日程、約1年10ヶ月という長旅であった。

岩倉具視を全権大使として、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳を全権副使とする総勢46名の大使節団である。留守は、三条実美、西郷隆盛、大隈重信らが守った。久米邦武が「特命全権大使米欧回覧実録」全百巻、五編五冊にまとめた。維新のリーダーたちが目撃した実録とその洞察の報告書である。それはまた、欧米回覧から得た情報を国民に知らすとの情報公開の報告書でもあった。明治11年(1878)に公刊、明治15年(1885)までに四刷まで増刷され3,500セット以上が刷られた。普及版もつくられた。大正12年(1923)の東京毎日新聞の記事では78万部以上販売あり、広く普及していた。

世界最高水準の工業とその担い手のブルジョワジーに驚き、「国の強弱は、人民の貧富による」と殖産興業路線を打ち出す。イギリスの産業革命からの遅れを30年と見る。後進国として国民全体の知力を合せば追いつけない時間ではないと確信する。先進国の帝国主義国の狭間で存立する小国を手本に、後進国として小国主義を選んでの富国路線であった。福沢諭吉が文明・半開・野蛮と3分類した中で、日本は半開である。

明治6年(1873)の政変で「征韓派」が下野し、殖産興業路線が基本国策として採用され、民間人の活動部隊が切り開かれた。日清、日露戦争を経て重工業の一応の創設を終えて、半開のアジアの中で唯一産業革命を成し遂げ、財閥を形成する。その一方で、戦争を経験したがゆえに、国際社会での存立としヨーロッパの列強に伍する大国主義に進む。

世界の経済構造を知る中で、住友の総理たちは世界に生きる道として「国益に貢献する」道を選び、進んだと言える。そして進んで欧米視察に幹部候補生を派遣した。

【参考文献】	日本の産業革命	石井寛治	講談社学術文庫
	岩倉使節団という冒険	泉 三郎	文春新書
	小国主義	田中 彰	岩波新書
	文明論之概略	福沢諭吉	岩波文庫

## 両墓制

2013. 8. 23

坪井利一郎

日本民族の死者の祀り方として、死体を埋葬する一次墓地と、靈魂の供養をする二次墓地とを別々につくる風習がある。死者を葬った墓でその霊を祀らず、別の場所に霊のみを移し迎えて祀る。死者を葬った墓を埋め墓、身墓、山墓、野辺、三昧、墓地と呼びけがれ多いものとする。別に清らかな所に霊を迎えて祀る墓を詣り墓、清め墓、精進墓、引き墓、空墓所(からむしよ)、ラントウバと呼ぶ。このように二重に墓をつくることを両墓制という。近畿地方に最も濃厚な分布が見られ、中部、関東で多く、そこから東西に離れる東北、北陸、中国、四国では分布が疎になる。

ラントウバは、卵塔場、乱塔場とも書く。

両墓制の分布が疎にある四国の中で、旧別子に蘭塔場があるのは、別子銅山の関係で上方の民俗によるものと考えられる。

山岳霊場に死者供養や墓の痕跡がある。山麓に墓地がある山は霊場化する。死者の肉体は朽ちても霊は山頂に昇って行って、そこに鎮まる。山麓は埋め墓、山上は詣り墓という図式ができる。京都の鳥辺野と東山の関係もこれである。鳥辺野は埋葬、火葬、風葬のおこなわれたところ、東山の霊山はその靈魂の供養がおこなわれる詣り墓であった。修験道の山では谷が葬場、山上が供養所だったために、立山では地獄谷と浄土山ができた。

旧別子の蘭塔場と円通寺跡地の墓地の関係も山上と麓・谷の関係に見えてくる。

近畿地方では、葛城、吉野、熊野、大峰、室生、長谷、槇尾、生駒、笠置、比叡、愛宕、鞍馬などの霊山霊場である。しかし、高野山を除いて他の霊山霊場は、菩提所としての信仰を失った。

先祖祭祀の場所は高野山に限らず、善光寺、大谷本廟、などが代表である。納骨霊場としては、浅草寺、成田山、四天王寺などが有名である。

**野口青楓さんの場合、前神寺に設置とした花供養塔を華道関係者には「花の申し子・青楓」の「詣り墓」とし、身内が供養するのは「遺骨を安置した箇所」にされたらと考える。**

### 【参考文献】

仏教と民俗	五来重	角川ソフィア文庫
日本人の死生観	五来重	角川選書
葬儀の歴史	芳賀登	雄山閣
寺・墓・先祖の民俗学	福田アジオ	大河書房

## 三社託宣

### 八幡大菩薩

鉄丸ヲ食スト雖モ、心汚ノ人ノ物ヲ受ケズ、銅焰ニ坐スト雖モ、心濁ノ人ノ処ニ至ラズ。

### 天照太神宮

謀計シテ眼前ノ利潤ヲ為スト雖モ、必ズ神明ノ罰当ル、正直ナラバ一旦依怙(たより)ニ非ズト雖モ、終ニハ日月ノ憐ヲ蒙ル。

### 春日大明神

千日注連(しめなわ)ヲ曳クト雖モ、邪見ノ家ニ至ラズ、重服深厚タリト雖モ(重い忌みがあっても)慈悲ノ室ニ赴クベシ。

以上の文が漢文で書かれていますが、その意味は次のようになります。

- 八幡大菩薩のお告げは、たとえ鉄球のような堅い物を食べても、心の汚れた人の物を受けない。たとえ銅の焰の上に座っても、心の汚れた人の処に行かない。
- 天照太神宮は、いろいろとたくらんで目の前の利益を得たとしても、必ず神明の罰が当たる。正直であれば一旦不利になっても、最後には日月の憐みが得られる。
- 春日大明神は、長らく注連をはって神聖な処としていても、そこにいる人の心がまがっておれば行かない。重い忌のある家でも、慈悲の心を持った人がおれば、その家に訪れます。

# 神 社

上田篤「日本の都市は海からつくられた」中公新書

神を祀る神社とは一体何か。その起源は、本当のところはよくわかっていない。

ヤマとは、漁師が海の上で漁場の位置を確認するための陸標（陸上のランドマーク）である遠近2点のヤマ見通して、2本の直線の交点が漁場の位置と定める。

このヤマに見立てられたのが、岩礁、島、岬、森、巨岩であり、そして山なのである。漁のためだけでなく、航海の目標や安全のためにもヤマはかかせない。

漁師はこれらのヤマを聖地に見立てて日ごろから信心をかかせない。鳥居を立て、酒肴を供えて、そして祭りをする。（石鎚山は寝仏である）

↓

神社発生の原初の形がみられる

## ①陸標神

例 大神神社(三輪山)

浅間神社(富士山)

陸上に都合よくヤマがあるわけではなく、陸上のしかるべき所に杉を植え、周辺の木を伐採して、あるいは石積みをして、人工のランドマークをつくる。

勝手に損壊されないために、人工のランドマークを聖地とする。このために「海から光る石が出てきたり、網に神像がかかったりする」などの説話がつくられる。これらが神体として祀られる。

## ②漂着神

例 出雲大社

神社は古くは「社(ヤシロ)」と呼ばれ、神を招請するところであった。

御屋代(ヤシロ) → 宮代(ミヤシロ) → ヤシロ

(敷地の意味)

神を招請するのは「気枯れ」 → 共膳共食 → 気晴れ → ハレ

# 寺

銀杏・平成23年6月号 小島昭安

釈尊の仏舎利を8か所に分骨して、8つの塔(塔廟)を造った。その後、紀元前3世紀ごろ、インドのアシャカ王が、84,000か所に仏塔を建てたのが後の寺院の原型になった。

## 蘭 塔 場

旧別子に元禄7年の大火災で亡くなった元締・杉本助七ら132人を祀る蘭塔場がある。

日本民族の死者の祀り方として、死体を埋葬する一次墓地と、靈魂の供養をする二次墓地とを別々につくる。死者を葬った墓でその霊を祀らず、別の場所に霊のみを移し迎えて祀る。死者を葬った墓を埋め墓、身墓、山墓、野辺、三昧、墓地と呼びけがれ多いものとする。別に清らかな所に霊を迎えて祀る墓を詣り墓、清め墓、精進墓、引き墓、空墓所(からむしよ)、ラントウバと呼ぶ。このように二重に墓をつくることを両墓制という。近畿地方に最も濃厚な分布が見られ、中部、関東で多く、そこから東西に離れる東北、北陸、中国、四国では分布が疎になる。

ラントウバは、卵塔場、乱塔場とも書く。

両墓制の分布が疎にある四国の中で、旧別子に蘭塔場があるのは、別子銅山の関係で上方の民俗によるものと考えられる。

山岳霊場に死者供養や墓の痕跡がある。山麓に墓地がある山は霊場化する。死者の肉体は朽ちても霊は山頂に昇って行って、そこに鎮まる。山麓は埋め墓、山上は詣り墓という図式ができる。京都の鳥辺野と東山の関係もこれである。鳥辺野は埋葬、火葬、風葬のおこなわれたところ、東山の霊山はその靈魂の供養がおこなわれる詣り墓であった。修験道の山では谷が葬場、山上が供養所だったために、立山では地獄谷と浄土山ができた。

旧別子の蘭塔場と円通寺跡地の墓地の関係も山上と麓・谷の関係に見えてくる。

近畿地方では、葛城、吉野、熊野、大峰、室生、長谷、槇尾、生駒、笠置、比叡、愛宕、鞍馬などの霊山霊場である。しかし、高野山を除いて他の霊山霊場は、菩提所としての信仰を失った。

先祖祭祀の場所は高野山に限らず、善光寺、大谷本廟、などが代表である。納骨霊場としては、浅草寺、成田山、四天王寺などが有名である。

### 三 社 託 宣

**八幡大菩薩** 鉄丸ヲ食スト雖モ、心汚ノ人ノ物ヲ受ケズ、銅焰ニ坐スト雖モ、心濁ノ人ノ処ニ至ラズ。

**天照太神宮** 謀計シテ眼前ノ利潤ヲ為スト雖モ、必ず神明ノ罰当ル、正直ナラバ一旦依怙(たより)ニ非ズト雖モ、終ニハ日月ノ憐ヲ蒙ル。

**春日大明神** 千日注連(しめなわ)ヲ曳クト雖モ、邪見ノ家ニ至ラズ、重服深厚タリト雖モ(重い忌みがあっても)慈悲ノ室ニ赴クベシ。

- 八幡大菩薩のお告げは、たとえ鉄球のような堅い物を食べても、心の汚れた人の物を受けない。たとえ銅の焰の上に座っても、心の汚れた人の処に行かない。
- 天照太神宮は、いろいろとたくらんで目の前の利益を得たとしても、必ず神明の罰が当たる。正直であれば一旦不利になっても、最後には日月の憐みが得られる。
- 春日大明神は、長らく注連をはって神聖な処としていても、そこにいる人の心がまがっておれば行かない。重い忌のある家でも、慈悲の心を持った人がおれば、その家に訪れます。

## 広瀬幸平の肩書

- 明治10年 広瀬幸平、住友家から全権の委任を受ける。総代理人となる。(江戸時代から事業主から全権を任される代理人制度があった)
- 明治15年 家法を制定する。  
第6条 総理人の規定
- 明治27年 広瀬幸平、住友家を退任  
その後、総理人の任命はない  
伊庭貞剛支配人に全権を一任する
- 明治28年 初めての重役会議を尾道で開催(理事・支配人による)
- 明治29年 家法改正  
総理人を総理事とする
- 明治33年 伊庭貞剛が、総理事に就任(総理事は伊庭が最初)  
(遡って総理事に相当職の総代理人の広瀬を初代と数える)

## 伊藤玉男の山小屋開設

- 昭和21年 4月 1日 住友金属鉱山に入社(基安坑)
- 昭和38年 8月 9日 住友金属鉱山が大合理化案を社員に提示する
- 昭和38年10月31日 住友金属鉱山を退職する
- 昭和38年12月28日 銅山峰ヒュッテ開設  
(角石原ヒュッテは住友金属鉱山山岳部時代の古称)  
(角石とは石英のこと)

**蘭塔場**

旧別子に元禄7年の大火災で亡くなった元締・杉本助七ら132人を祀る蘭塔場がある。

日本民族の死者の祀り方として、死体を埋葬する一次墓地と、靈魂の供養をする二次墓地とを別々につくる。死者を葬った墓でその霊を祀らず、別の場所に霊のみを移し迎えて祀る。死者を葬った墓を埋め墓、身墓、山墓、野辺、三昧、墓地と呼びけがれ多いものとする。別に清らかな所に霊を迎えて祀る墓を詣り墓、清め墓、精進墓、引き墓、空墓所(からむしよ)、ラントウバと呼ぶ。このように二重に墓をつくることを両墓制という。近畿地方に最も濃厚な分布が見られ、中部、関東で多く、そこから東西に離れる東北、北陸、中国、四国では分布が疎になる。

ラントウバは、卵塔場、乱塔場とも書く。

両墓制の分布が疎にある四国の中で、旧別子に蘭塔場があるのは、別子銅山の関係で上方の民俗によるものと考えられる。

山岳霊場に死者供養や墓の痕跡がある。山麓に墓地がある山は霊場化する。死者の肉体は朽ちても霊は山頂に昇って行って、そこに鎮まる。山麓は埋め墓、山上は詣り墓という図式ができる。京都の鳥辺野と東山の関係もこれである。鳥辺野は埋葬、火葬、風葬のおこなわれたところ、東山の霊山はその靈魂の供養がおこなわれる詣り墓であった。修験道の山では谷が葬場、山上が供養所だったために、立山では地獄谷と浄土山ができた。

旧別子の蘭塔場と円通寺跡地の墓地の関係も山上と麓・谷の関係に見えてくる。

近畿地方では、葛城、吉野、熊野、大峰、室生、長谷、槇尾、生駒、笠置、比叡、愛宕、鞍馬などの霊山霊場である。しかし、高野山を除いて他の霊山霊場は、菩提所としての信仰を失った。

先祖祭祀の場所は高野山に限らず、善光寺、大谷本廟、などが代表である。納骨霊場としては、浅草寺、成田山、四天王寺などが有名である。

**【参考文献】**

仏教と民俗	五来重	角川ソフィア文庫
日本人の死生観	五来重	角川選書
葬儀の歴史	芳賀登	雄山閣
寺・墓・先祖の民俗学	福田アジオ	大河書房



# 別子銅山の書籍と遺産の取組み

2014.5.24 坪井利一郎

61.	S.36.11	こいはま史跡と名勝(合田)	
67.	S42		南部観光開発構想
69.	S44.4	旧別子銅山案内(伊藤・佐々木)	
73.	S48	明治の別子(伊藤)	別子銅山休山
74.	S49	別子物語(朝日新聞)	
		別子銅山(合田)	
75.	S50		別子銅山記念館開設
86.	S61		銅(憧)景のまちづくり・生涯技術ふれあいタウン報告書(新居浜JC)
87.	S62	銅の里－旧別子銅山遺跡探訪	
88.	S63		ポケットパーク整備野外彫刻
90.	H2	別子銅山物語(芥川)	別子銅山開坑三百年祭 住友化学歴史資料館開設
91.	H3	住友別子鉱山史	マイントピア別子・端出場地区開設
92.	H4	<b>あかがねの里－別子銅山の歴史(坪井)</b>	
94.	H6		銅夢物語・新居浜市民会議発足
96.	H8	歓喜の鉱山(高橋)	
97.	H9		施政運営方針「先人の偉業に学ぶ近代産業遺産のロマンの息づくまちづくり」 広瀬歴史記念館開設
99.	H11	未来への鉱脈(長井)	南高等学校がホームページでNHK会長賞 ボランティアガイド開始
00.	H12		近代化産業遺産全国フォーラム
03.	H15	広瀬幸平小伝	広瀬幸平の銅像復元 新居浜市と別子山村が合併 広瀬邸が重要文化財
04.	H16	目論見書全訳	産業遺産活用室を設置
07.	H19	未来への鉱脈の再版	別子銅山文化遺産課設置
08.	H20		新居浜市あかがね基金
11.	H23		<b>別子銅山松山展(東予地方局)</b>
12.	H24		別子銅山尾道展(東予地方局)
13.	H25	<b>別子銅山(坪井)</b>	別子銅山大阪展(東予地方局)
14.	H26		別子銅山東京展(東予地方局)

## 川の江代官所

広瀬幸平と川田小一郎が会談した時は伊予銀行界隈。川の江商店街の西側の道路沿いに「一柳直家公陣屋跡の石柱」、「陣屋跡の説明板」がある。

### ●印の箇所

城山の麓への移転は、明治3年正月。

坂本屋当主の話では、広瀬は坂本屋に宿泊した。